

(件名) 新型コロナウイルス感染はただの風邪であるという認識が広まっているが、ウイルス感染はワクチン接種と同様に危険であることを周知することを求める陳情

(陳情の趣旨)

この数か月程度で、X (ツイッター) などを見ていると、「新型コロナウイルス感染はただの風邪であるので、怖がる必要はない。」という書き込みが目立って増えているように見える。

これは、ワクチンが危険であるとする認識が広まってきた反動であるように見える。ワクチン接種が危険であるその仕組みが説明され、更にデータとして、例えばアメリカのCDCから今年3月に、2021年の妊産婦死亡率が発表され、それには10万人あたりの妊産婦死亡数が、新型コロナワクチン接種開始以前である2019年：20.1、2020年：23.8であったのに対して、ワクチン接種開始後の2021年には32.9とほぼ50%の増加があったことが記載されている。

その為、ワクチンさえ避ければ、新型コロナウイルス感染は特に用心する必要はないという風潮が出てきているのであろう。しかし、これは明確に間違いだ。ワクチンの毒性の元は、スパイクタンパクであり、これは新型コロナウイルスにあるものだ。その為、ワクチン接種もウイルス感染も、結果的には同じ健康影響を及ぼすことになる。

ワクチンは一度に体内へ入るスパイクタンパクの量が自然感染に比べると格段に多い。しかも、筋肉注射されるため、血流に直ぐにのり、全身の臓器にスパイクタンパクが半日程度で広まってしまう。しかし、自然感染はそもそも呼吸器の粘膜にウイルスが付着し、その大部分は粘液と共に胃へ流されて胃液によって無効化される。だから、粘膜細胞に感染するウイルス数はもともとかなり少ない。その為、自然感染ではなかなか深刻な健康影響が出てこない。

日本の規制官庁やマスコミは、新型コロナ感染に関する研究論文への言及をほとんどしないが、非常に多くの研究論文が発表されている。Thiland Medical News (<https://www.thailandmedical.news/>) というサイトにはほぼ毎日新たな論文の紹介記事が掲載されている。新型コロナウイルスが癌の発生を促すウイルスの活性化をするという記事とか、免疫細胞であるT細胞の減少が新型コロナウイルスによって引き起こされ、結果的に癌の多発が起こるという記事が、もとの研究論文と共に紹介されている。

新型コロナウイルス感染の始まりは4年前の2019年末である。その為、ワクチンはもちろんのこと、ウイルスの自然感染自体についても、長期影響がどうなるかは当然のことながらまだ分かっていない。しかし、新型コロナウイルスにはエイズウイルスと同じくgp-120と言う遺伝子並びがあり、この遺伝子並びがあることは、免疫細胞への新型コロナウイルスの感染と免疫細胞内部でのウイルスの増殖が起こり得ることを示している。そのため、ほぼ確実に長期の潜伏期後の健康影響があると判断すべきだ。

以上の趣旨により下記のことを陳情する。

- 1 県の広報誌などにより，新型コロナウイルス感染自体がただの風邪ではなく，長期の健康影響を引き起こす可能性が高いことを周知すること。
- 2 9月20日より新型コロナのXBB対応型のワクチン接種が始まるが，その接種券の郵送時に，ウイルス感染自体についての危険性を述べるお知らせを同封する様に県下の自治体へ呼びかけること。

以上